

表現への情熱 カンデンスキー、ルオーと色の冒険者たち

パナソニック汐留ミュージアム（東京・新橋） 2017.10.17～12.20



「ヴァシーリー・カンデンスキー」(1866～1944)は、抽象絵画の創始者とされ、「ジュルジュ・ルオー」(1871～1958)は、20世紀最大の宗教画家である。

本展は、“色とかたちを軸として”「カンデンスキー」を中心とするドイツ表現主義と「ルオー」が共鳴するさまを探る初の試みとして開催されている。

20世紀の初めには、「ルオー」が重視したパリのサロン・ドートンヌに「カンデンスキー」が出品を続け、「カンデンスキー」率いるミュンヘン新芸術家協会の展覧会に「ルオー」が出品する時期があり、同世代の二人がそれぞれ「フォーヴィスム」（野獣派：20世紀初頭の絵画流派）と「ドイツ表現主義」の拠点となった展覧会では、お互いに運動への関心を深めていたことがうかがえる。

「展覧会の見どころ」

1章：カンデンスキーとルオーの交差点

「カンデンスキー」は、ミュンヘンを拠点に色彩に満ちた新しい絵画の制作に邁進し、「ルオー」はサロン・ドートンヌを本拠として色彩とフォルムによる独自の表現を探求して、色彩と向き合うことで旧来の芸術を乗り越えようとした。

2章：色の冒険者たちの共鳴

ドイツ表現主義の運動は、「カンデンスキー」が始めた「青騎士」の活動へと穏やかにまとまりながら展開し、自然回復的で原始文明の表現や中世や古代などの理想化された光景を表現に取り入れ、「ルオー」は親和性が感じられる。

第3章：カンデンスキー、クレー、ルオー —それぞれの飛翔

「カンデンスキー」は抽象画へと歩を進め、「クレー」は彼独特の抽象世界を展開したが、「ルオー」はキリスト教の信仰する独自の絵画を追求し、彼らはそれぞれの色の冒険に挑み、表現の大きな地平を切り拓いた。

カンデンスキー 《商人たちの到着》 1905年（宮城県美術館蔵）

遠景のロシアの玉ねぎ様建物と城壁、木々、帆船、近景の壺の色の組み合わせ、色の大きさ、色そのものの美しさ、まさに色の冒険者というコトバがぴったりで、遠くから見ても良いし近くでじっくり鑑賞するのも良い作品である。

「ルオー」作、パリからの初来日「約20点」を含め、《キリストの洗礼》（上部丸枠の作品）、《ヒンデンブルグの肖像》など「約40点」が展示されている。